

学習講座

啓成校区の歴史散策

啓成公民館



※ 啓成校区の歴史を訪ねて ※

解説 亀尾 八洲雄

啓成校区は県立米子工業高校の新築工事の際の発掘調査により発見された「弥生時代居住地跡」や、勝田神社後山に残る「横穴古墳」などから見て約二千年前より人類が生活していた事が明らかになっております。

しかし、付近の建築現場の地下を見ますと、約五十センチから一米下には貝殻の層も発見されていて、この付近一帯が海底であった事も明らかです。

古代の「山陰道」が淀江から尾高に抜け、手問關を径て出雲国に入り、安田、荒島から出雲国府であった松江の大庭に通じていて、米子は通っておりません。米子の歴史は慶長五年（一六〇〇）中村伯耆守一忠の米子入府によって、米子の繁栄の基礎が作られたのであります。

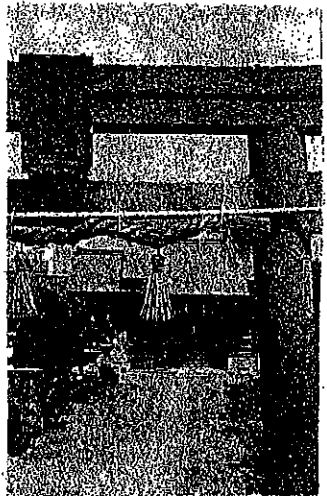
弥生時代の人口は約五百人、米子城の構築時代は約三千人、幕末でも約八千人と言われております。約五十年前の啓成校区は、一帯は桑畑でありまして、現在の高島屋は「啓成尋常小学校」があり、その斜め前には「角盤高等小学校」（現米子市公会堂）が建っていて、その前に半那証券の建物があり、以外は桑畑でありました。

角盤町通りも「米子館」と芝居小屋の「朝日座」が目立っていて、人家は疎（まば）らであって、桑畑が多くを占めていました。

勝田の歴史を訪ねては、数年前にも一度「啓成公民館」によって行って戴いておりましたが、説明不十分な面もあったと思いますので、疑問な点は質問して戴きたいと思っております。

① 蟬丸神社

蟬丸は琵琶法師の元祖とされ、音曲芸の祖神とされているが、生年も没年も不明であり、伝承地も全国にあるが、滋賀県大津市逢坂には蟬丸を祀る「關蟬丸神社」が三ヶ所もある。米子市博労町三丁目にも「蟬丸神社」があり、その由緒は不明とされているが、蟬丸終焉伝説が残されている。平安時代にはこの辺りは、野原で砂山もあり池もあったと言われる。ある日、通りがかりの人が池に近づくこと歳おいた盲目の琵琶法師が衰弱しきって、息も絶えだえで倒れていた。長旅でやつれ果て「私は蟬丸」と言う者である。業病に取り付かれ、治療の道を見いだす為旅に出てこゝまで来たが、もはや私は力尽きてこの地が終焉の地となった。かかる上は我が死



蟬丸神社（博労町四丁目）

屍を荒野に晒し、鳥獣の意の俣になりたくないと思う。私の死後はここに葬ってもらい、後世まで祀ってくだされば、世の業病に苦しむ人たちを救ってあげよう」と言ってお息を引き取った。

人々は蟬丸の遺言通りに池のそばに葬り小社を建てたら、以来この地には悪疫がはやらなかつたと言われる。

蟬丸は皇胤説があり、人皇第五十九代宇多天皇の皇子、敦実親王であるとか、醍醐天皇の皇子などとも言われている。蟬丸の和歌は「小倉百人一首」の、

「これやこの、行くも帰る別れては、知るも知らぬも逢坂の關」

の句が有名であり、古今和歌集にも三首詠まれている。

② 本源寺跡

米子には約一千年以前より神社・仏閣が信仰の対象として建てられていた。

特に海岸に近い巨石群のある、現在の青洞寺岩の場所は米子の西にあたり、西方浄土と言われる極楽に近い意味から代々の米子城主の菩提所とされてきた。

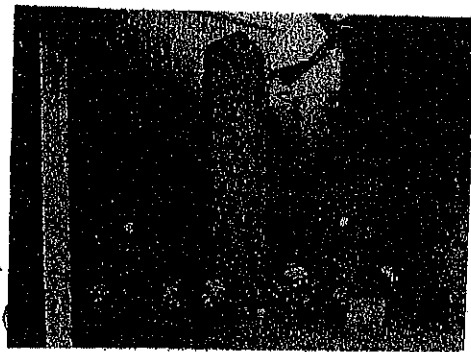
極楽寺(現吉祥院)・曹溪院・海禪寺・禪源寺・泰蔵寺・青洞寺などが建てられていた。

鳥取藩主池田光仲は、明国より渡来した黄檗宗に魅力を感じ、菩提所龍峰寺をして改宗を図ったが、本山の妙心寺の反対に遇い後には政治問題にまで発展したので、家老の荒尾修理亮成直が変わって黄檗宗に入信して、元禄四年(一六九一)六月十八日、玉泉和尚に書を託し、京都の宇治の万福寺に黄檗宗への改宗願いを出したのであった。

元禄十五年(一七〇二)は、二度の大洪水により日野川の流域が変わる程の異変があり、海辺にあった菩提所の泰蔵寺も激浪により流失の危機まで追い込まれ、藩に願って勝田山の麓に土地の拝領願いを提出し、早速にその地の近くに一寺を建立して「本源寺」と号したのであった。

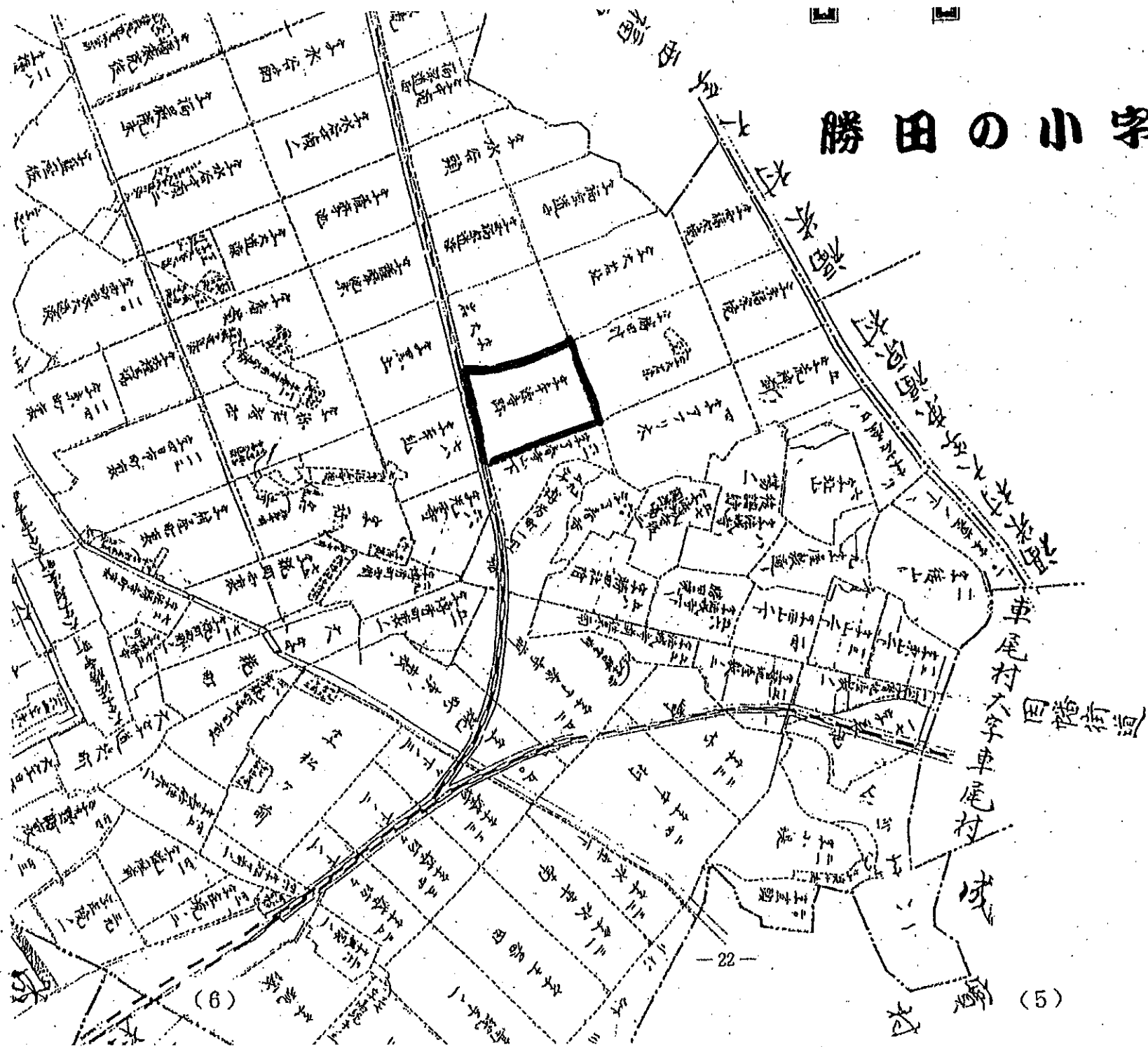
本源寺の創建は宝永七年(一七二〇)と言われるが、了春寺裏の墓域に「本源四代祖燈淨伝和尚之塔 寛政九年(一七九七)十二月念(二十)四日」と刻された墓碑が唯一の本源寺の名残を残している。

やがて宇治の平等院から許可がでて、現在の了春寺を創建して黄檗宗として現在に至ったのであった。



本源寺跡

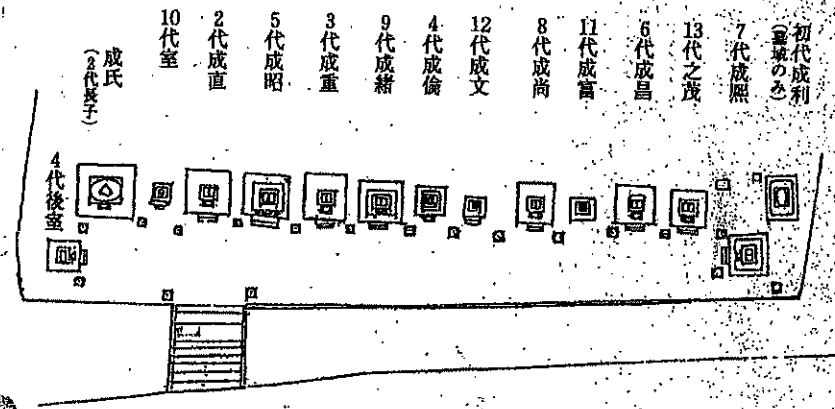
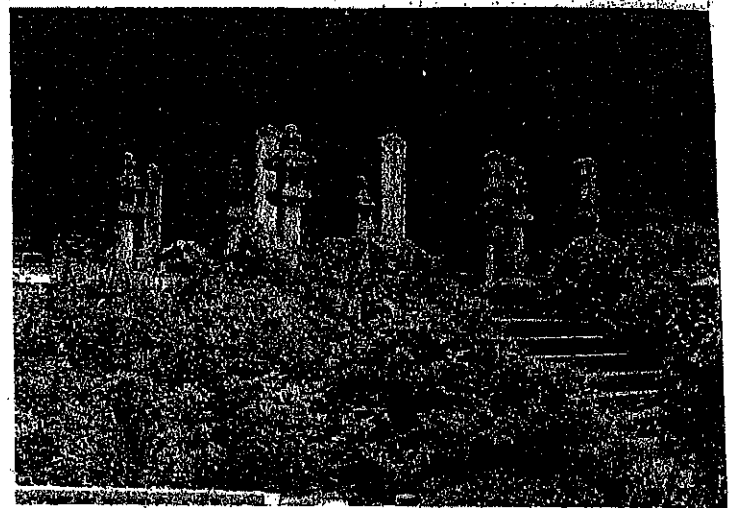
勝田の小字図



(6)

(5)

③ 荒尾氏墓域(了春寺)



了春寺 荒尾氏歴代の墓碑

(7)

④ 村河与一右衛門直方墓碑

⑤ 法城寺(根上り連理松)(名水 連理ノ井戸)(生田春月墓碑)(西田税墓碑)

米子名誉市民とされている「相寄る魂」で余りにも著名な薄幸な詩人、生田春月と、二・二六事件で指導者とされる西田税(みつぎ)らが、永遠の眠りについている、法城寺の山門の下に今は枯れて天然記念物の指定を解除された「根上り連理松」が、今にも崩れ落ちそうな残骸を晒している。

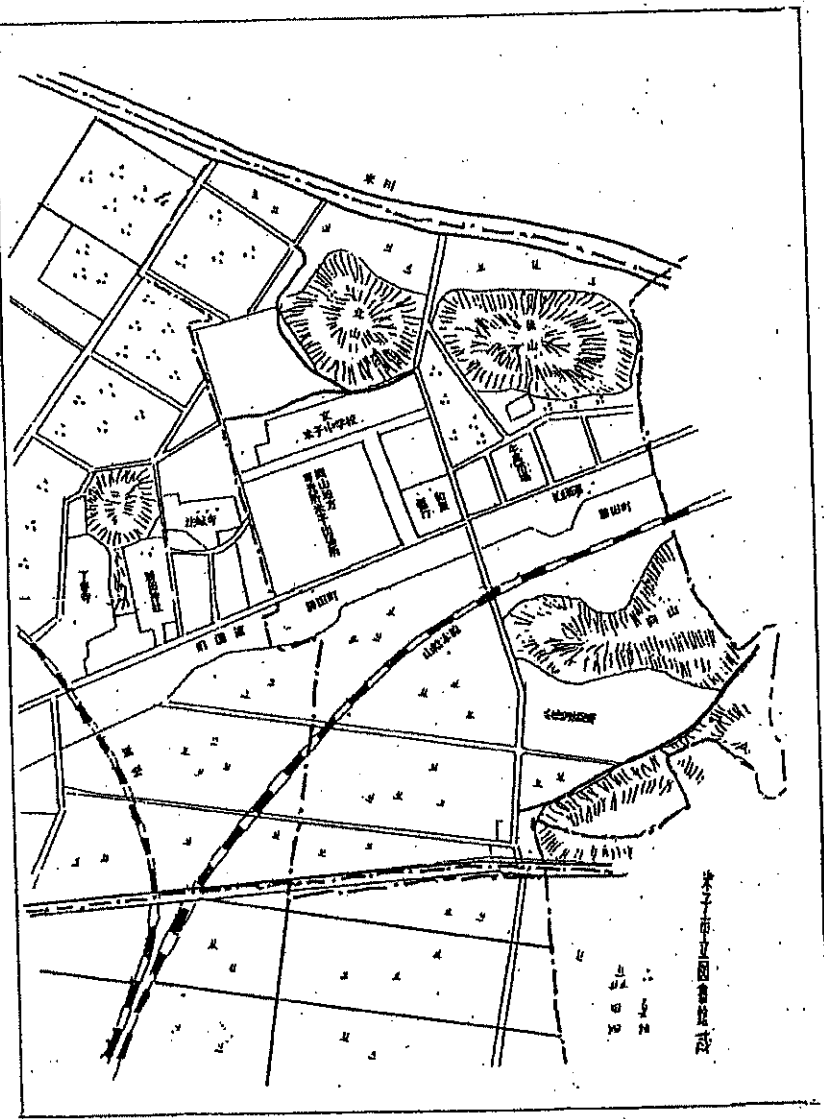
大正六年(一九一七)七月、米子町は老松保護の為石垣・木柵を設けた。大正十四年十月には内務省より天然記念物の指定を受けている。

根上り松は周囲の砂が風に吹き飛ばされて根が露出したもので、法城寺付近には十数の根上り松があったと言われる。大小二本の並んだ松の根が横の松に癒着して、さながら橋を架けたような特異な状態になっている。

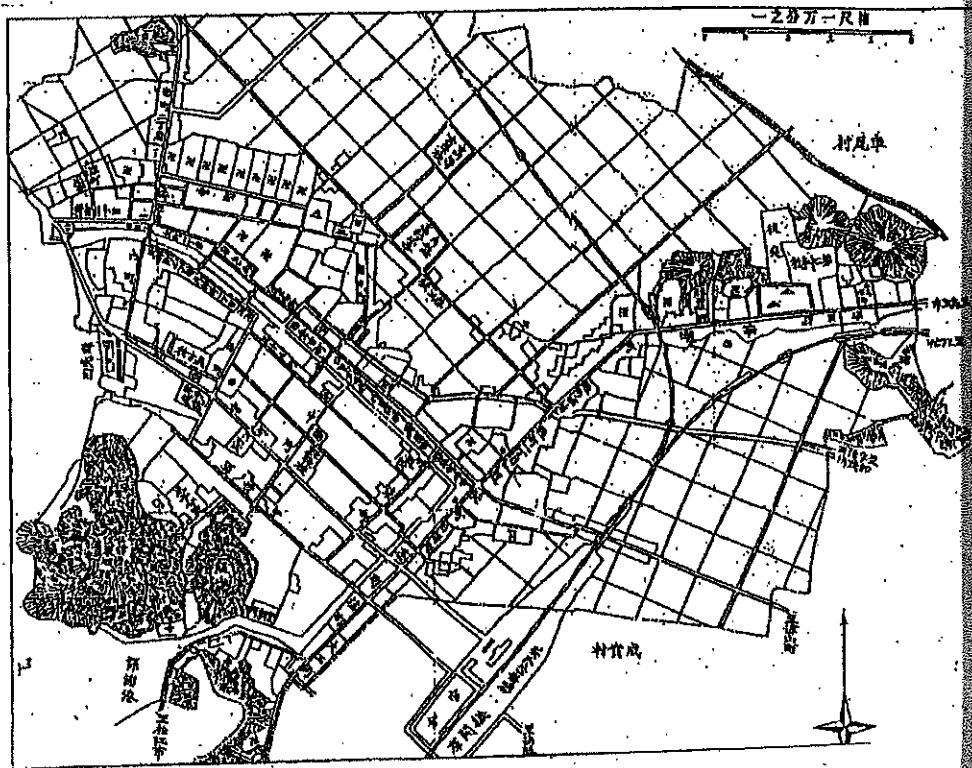
大松は高さ約四十米あり、周囲は約五・五米、根が四・五米露出していた。小松は高さ約三十米、周囲約三・三米あり、根は二・七米露出していた。

その連理松も昭和四十三年、老衰と松食い虫の被害を受けて枯れ始めたので、米子市教育委員会は文部省の許可を受け、地上九米の位置で伐採された。

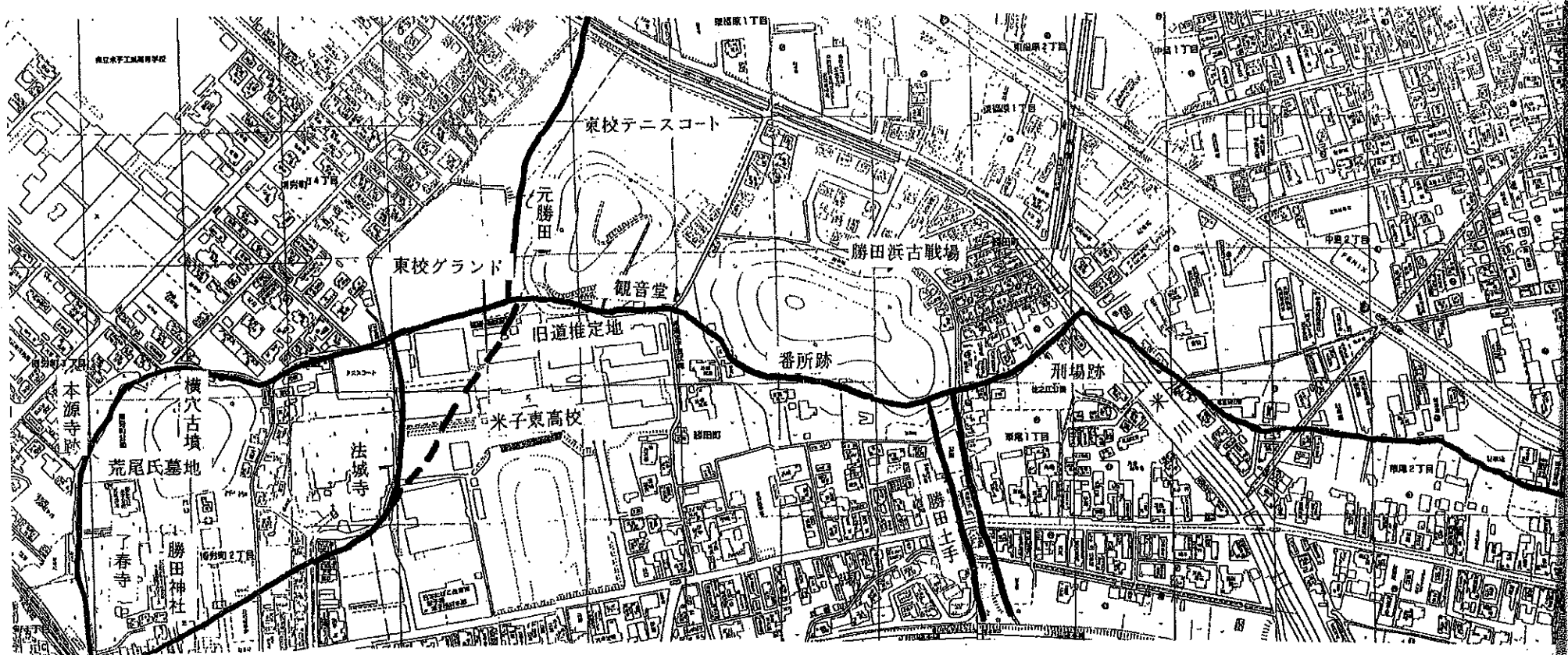
(8)



(10)



(9)



山陰古道

山陰古道に付いては確たる資料はない。然し、これは私の創作や推定ではない。

鳥取県立米子東高校のグラウンド横から観音堂前にかけて、小道が続いている。

更に小道は山裾を通り、勝田土手跡から勝田浜処刑場跡を経て米川を渡り、車尾と続いていたのであるが、痕跡は疎らである。

古老の話では観音堂は京都の仁和寺に縁(ゆかり)があると言われる。

さすれば約一千年以上の古い歴史を持っている訳である。それと、本尊は棟札によれば「馬頭観世音菩薩と言われる。

千手観世音菩薩・十一面観世音菩薩などと同じく、由緒の古い事を物語っている。

それと古道の証明に「勝田番所跡」がある。番所は余りにも米子に近いので、後に車尾(現車尾簡易郵便局)に移されている。

車尾の梅翁寺の墓地の中を横切る小道が残されている。

古道は博労町の一里松(現曾田理髪店)前から勝田神社境内を横切り、法城寺前から米子東高校のグラウンドに入り、後山の下で西福原へ向かう道と別れて、観音堂前を経て番所前へ勝田土手へ処刑場へ車尾と続いていたのであるが、その時代は勿論これら無くして元禄年間に造られたものである。車尾の旧国道と現在の「九号線」の中間の畑の中を、やっと通れるような小道が続いているが、途中、車尾小学校の所で切れているが、ここに勝田から移された番所があった。梅翁寺裏から王子製紙の社宅内を通り、日野川を渡って日吉津村に入り、鳥取に向かっていたので「山陰古道」であったのである。

⑥ 山陰古道(旧因幡街道)

道は本来は、家と家、家と田畑をつなぐのが道であった。やがて、時代とともに村と村、町と町、国と国を繋ぐ道と発展していった。古道として

は「熊野古道」「鎌倉道」などがあり、山陰でも「大山道」「尼子道」などが残っている。いわゆる信仰を対象にした道、隠れ里、砦と要害を結ぶ道として造られたもので、やがて国庁などができると、都と国府をつなぐ交通路として発展していったもので、その道も大八車が通れる二間(約四米)位の道であったと思われる。

山陰古道は今も一部分が痕跡を留めている。JR境線の博労町踏切付近から勝田神社の境内を横切り、法城寺の根上り連理松の下を通り、鳥取県立米子東高校のグラウンド内に入ると米子東高校裏山(北山)手前で西福原村への道と分かれて、勝田観音堂の前を山麓を道は東に進み、勝田番所前を通りやがて車尾の裏通りを横切り、梅翁寺の墓地の裏を通り、日野川を渡り鳥取に向かっていたのであった。

⑦ 元勝田(椎山神社跡)

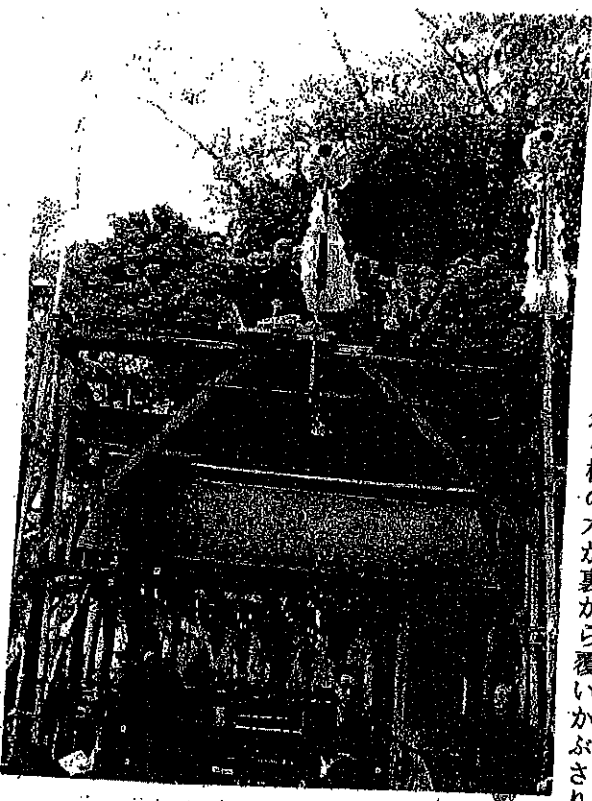
古くより米子をはじめ弓浜半島の氏神さまとして信仰を集めていたのは「かんださん」と言われていた勝田神社であった。

米子十八町と「勝田之庄」と言われた、弓浜半島二十八村が氏子であったと言われ

る。勝田神社は祭神は石見国津和野の浪士、勝田上総之助と言うことは今は明らかである。本勝田に付いては野坂寛治氏は「米子界限」に次の様に書いている。

元勝田神社境内は老松むら立ってヒルなお暗く、池も黒く濁って物凄いのみならず、低学生はここへの集合命令が直に鉄拳制裁を意味するものだから、思

い出しても身震いする。高学年になってヤルようになって、余り気持ちのいい場所でも無かった。社殿は小さい宮造りで、大きき三抱えに余る椎の木が裏から覆いかぶさり、



椎山神社遷宮
(元勝田)

藁で作った蛇形が幾まわりも、もくれつかせてあって、色赤の小旗が立ち並ぶ風景はよかった。これは「ヨナ荒神サン」として、子供の夜泣きを封じてもらった願いときである。さて元勝田さんと心安くもうしましたが、本名を「榎山神社」と申し上げ、大正十年七月に立てられた石柱に「大土之御祖神」と彫られている。昭和二十四年十二月三日に再建造営がなされて、凄みも減じられ風雅味も減せられた。

⑧ 勝田観音堂

西福原から法勝寺街道に続く古道があり、そのほとりに勝田観音堂が立っている。以前は山の下に間口四間(約七米)に、奥行き三間(約五・五米)の祀堂であった。昭和三十年頃は祀堂の横の座敷に老人が住まいしていて、昼間は各地の家々を回って物乞いをして、貰ってきた米や野菜で自炊をしていた。

その為、建物は真っ黒になり、仏像なども黒く変色していた。昔は各地の祀堂には旅人などが一夜の宿を求めて宿泊したり、住みついて付近の雑用をしたりして幾らかの駄賃を貰ったり、祈禱や吊いの際には住職の真似をして葬を行ったりしていた。勝田観音堂は京都の仁和寺にゆかりがあると言われている。さすれば約一千年以上の由緒をもっているのである。

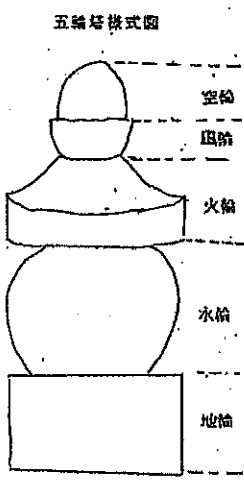
本尊は馬頭観世音であると言われるが、その本尊は心なき者に持ち去られ今はない。十一面観世音・千手観世音菩薩などと同じく、信仰の歴史の古い事を表している。それと、かつては辻堂などは街道の傍にあって、旅人などの道中安全・集落の人々の無事息災を護ったものであった。この観音堂の前の小道がかつては主要街道であった証明でもある。

⑨ 五輪塔

五輪塔は徳川幕府以前の戦国時代まで造立された墓碑である。応仁の乱以降、天下を二分した戦の明け暮れが続いた。伯耆は山名氏に属し、後には伯耆と出雲も東西に分かれて、長い戦いが続いた。伯耆は山名氏に属し、後には毛利氏に変わり、出雲は京極氏から尼子氏と激しい攻防が続き、徳川家康によって天下が統一され、平和が訪れたのであった。

私たちの近くに散在する五輪塔は、尼子・毛利の合戦に関連するものが多く、時代様式もそれを表している。

五輪塔の起源は万法を生成する五大、すなわち宇宙を現していると言われ、地大・水大・火大・風大・空大を表していると言われ、五輪塔は下方より方形・球形・三角形・半球円・団形の五部を積み上げ、上部より空輪・風輪・火輪・水輪・



五輪塔 様式図

地輪と言われ、空輪と風輪は一石できており、空風輪とも呼ばれる。

五輪塔には文字は彫られていないが、在銘の五輪塔で奥州平泉の中尊寺の仁安四年（一一六九）がある。鎌倉時代から造立されていたようである。

五輪塔には墓碑と供養塔があり、討ち取った相手の墓碑を立てたという記録もある。毛利・尼子の合戦でも日吉津の浜で、毛利方四十数人に囲まれて討死した羽倉孫兵衛元陰を杉原盛重は鄭重に葬り、地藏尊を建立している。日吉津村指定文化財の「羽倉地藏」が孫兵衛の供養塔である。

勝田の五輪塔は後述する「勝田浜合戦」の戦死者を葬ったもので、二度の合戦で尼子・毛利勢の二百余人が討死している。五輪塔は付近の山麓・砂山などに散在していたものを、地区の人たちによって集められたもので、同型の五輪塔は宗像にも散在していたが法勝寺電車敷設工事の際、発見されて今は旧「車道跡」にまとめられている。

石は黙して語らないが、石質・形式によってその年代を知らせている。

年代によって形式が変化してその時代を物語っている。

時代判定は「笠」と呼ばれる火輪で判別できる。時代の古い鎌倉時代の笠は層が厚く、次第に時代とともに薄くなっている。

それと軒反（のきぞり）と言う、



勝田観音堂の五輪塔

笠の傾斜が始めは直であったものが、次第に反ってきている。

石質は「片麻花崗岩」（へんまかこうがん）と言われる海底火山岩で、石に気泡が入り小さな穴があいている。五輪塔は山陰では加工した痕跡が見られず、新潟・佐渡あたりで造られたのを船で運んだのではと言われている。

⑩ 勝田浜合戦古戦場旧跡

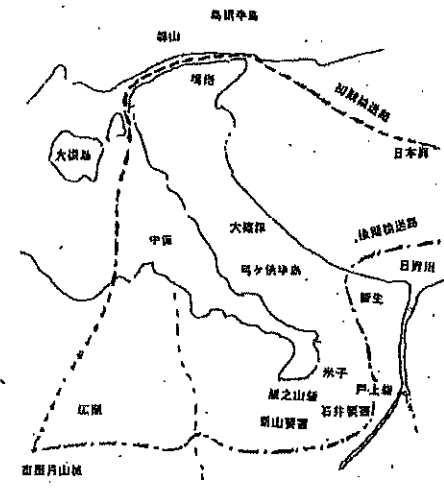
勝田の地で合戦があったと判ったのは、勝田観音堂の横に十数基の五輪塔が乱積されていることからであった。時代様式から見て尼子・毛利時代と言うことは明らかである。そして『雲陽軍実記』に勝田浜での合戦の記載を発見したのであった。

弓ヶ浜に合戦ありと聞きて、警護の軍勢、小船に取り乗って漕ぎ尽きて一人も逃がさじと、後を取り巻きける処に、神田浜（勝田）へ富田より伏勢を出されて、熊谷新右衛門、横道兵庫介、宇山大八、川添小平太ら蟄龍に陣取っておりけるが、船手より後巻かるを見て、渚に沿って打ち向いければ船手の勢、岸にも寄せ得ず、唯、因伯の兵糧船を奪い取りて、大江へ引きければ、伏兵は敗戦を助け引き入りけり。

双方死人百人、手負いはその数を知らずとぞ。

これは永禄六年（一五六二）十一月二十七日、毛利勢は富田月山城に迫り、包囲網を狭めていた。島根半島は毛利方の支配下に入り、但馬・因幡より運ばれていた食料・弾薬の運搬船の境海峡の通航が不能になり、毛利水軍の警戒の手薄な間隙をねらって弓ヶ浜半島に陸揚げしていた。富田月山城からは警護の武士や雑兵・人足がその物資の引き取りに出張り、弓ヶ浜半島から月山城へ最短距離の米原・勝田・長砂・宗像・成実・新山から出雲に入り、月山城へ運び込んでいたのであった。

尼子への救援物資が陸揚げされたと探知した毛利勢は直に手勢二百人余が鉄砲衆五十挺を含めた毛利勢が直ちに追跡し、物資を運ぶ尼子勢を追跡してたのであった。勝田辺りで追いついた毛利勢と尼子勢と激しい合戦が交わされ、双方百人と言う討死者を出し負傷者も山野に溢れたことであろう。毛利方の記録『陰徳太平記』には、毛利勢は陸揚げした物資は奪い取り軍船に引き揚げたと記されており、毛利元就より感状を下されたとある。



富田月山城物資輸送路

勝田浜ではその後、元龜二年（一五七一）三月十八日も合戦が行なわれている。勝田浜の合戦の三年後の永禄九年（一五六六）十一月二十八日、尼子義久・倫久・秀久三兄弟は毛利に降伏して芸州に送られた。

永禄十一年（一五六九）になると毛利元就は九州の大友義鎮（宗麟）と対立して、九州へ出兵した。京都に居た尼子の旧臣山中鹿之介は、今日との東福寺で仏門に入っていた新官党の尼子誠久の遺児を還俗させると、旧臣ら三百余人を集め但馬の豪族奈佐日本之介の軍船で隠岐に渡り、出雲に攻め込んだ。

たちまち尼子勢は集まった旧臣が数万余となつて、各地の城を攻め陥とした。九州に出兵していた毛利元就は直ちに軍を引き揚げると、一万二千騎が富田月山城の救援に出雲に向かった。尼子勢は月山城の手前の布部山で迎え討つと鹿之介ら約六千六百騎が布陣した。二月十四日夜明けとともに攻防が始まったが、尼子勢は山上に布陣し「上り原」の平地に布陣した毛利勢に対し、攻撃を仕掛けた。初めは尼子勢が優勢であったが、吉川元春は正攻方ではこの堅陣を突破できないと、地元民を買収して本陣への裏道を聞き出すと、迂回して背後から本陣を攻めた。

不意を突かれた尼子勢は敗走して、瞬く間に落とした諸城は毛利勢に奪い返された。山中鹿之助も水谷口から山佐く熊野と道なき山野を末次砦へと敗走を続けた。

島根半島の森山の鎌岳城（現航空自衛隊森山通信隊）に居た、羽倉孫兵衛・目加田采女らは米子の飯山砦を攻め落として劣勢を撥ね変えさんと、元龜二年三月十八日、五百五十人が船十五艘に分乗して夜討ちを仕掛けた。

飯山には二百余人が籠っていたが尼子勢の猛攻に砦に逃げ込み、尾高からの救援

を待って門を閉ざした。尼子勢は町々に火を放ち引き揚げたが、翌十九日再び津に上陸すると飯山砦を攻撃した。

芸州吉田の郡山城に向向していた、杉原播磨守盛重はこの日の朝、郡山より百騎が尼子勢の背後から攻めた。

飯山の手勢二百騎も撃って出て、尼子勢も惨敗して上陸地の日吉津浜を目標敗走した。殿（しんがり）を努めたのは、勇猛の誉れ高い羽倉孫兵衛元陰である。踏みとどまって味方を遠くへ逃すため、踏みとどまり敵とわたりあった。

敗走する尼子勢の最尾を努め、追撃する毛利勢と闘い日吉津海岸まで辿りついた。味方の船は沖合はるかに漕ぎ出していた。

孫兵衛はもはやこれまでと、付き添う郎党一人と共に渚の松を背にして立ち、槍十四、五本も斬って落としたが、四十数人に囲まれ槍が折れ、多勢の兵に囲まれ最早これまでと、郎党と共に腹かき切って渚の露と消えたのであった。

今はのどかな勝田浜に残る無数の五輪塔が、四百三十年前の出来事を伝えている。



杉原盛重は味方の槍、十四、五本に孫兵衛の太刀傷あるを見て、哀れ剛勇のよと感嘆してはらはらと落涙して、供養の地蔵尊を建立している。

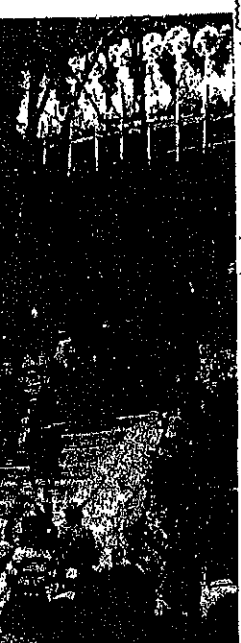
「羽倉地蔵」と呼ばれ、いまは「日吉津村指定重要文化財」となっている。四百三十年前討死した日吉津の浜も、日野川の流砂により海岸線も遙か彼方へ、今は共同墓地となり半世紀前には松籟（しょうらい）が響いていた大松もなく、羽倉地蔵が昔の名残を伝えている。

① 勝田会所跡（稻荷神社跡）

勝田会所は鳥取藩主池田光仲が備前

岡山より転封後の、寛永九年（一六三二）に勝田村に建てられたが、米子に

近く土地が狭小の為、天明元年（一七



又、これらの山に入って木材を伐れば、過料として米四斗を収めさせ、枝一本でも米二斗を収めさせた。

収める米が無ければ村の責任として収めさせている。勝田会所跡は八幡神社が建てられたが、文化年間（一八〇四〜一八一八）吉川源三郎によって京都の鞍馬の永保稲荷大明神を勧進し、代々が神官として続いてきたが、戦後末裔の吉川揚一氏は医者となり国立米子病院長となり、南極探検隊などの医師として度々南極に行っておられる。昭和二十六年三月二十六日社殿の再建造営がなされたが、二十数段の石段の横には赤く塗られた鳥居が並んでいたが、今は放置され竹が茂り足を踏みいれる事もできない。

② 勝田土手跡

米子は日野川・法勝寺川など度々の洪水で、大きな災害を受けていた。慶長五年（一六〇〇）米子城主として入府した中村伯耆守一忠は、米子を水害から守るため「宗像土手」を構築している。

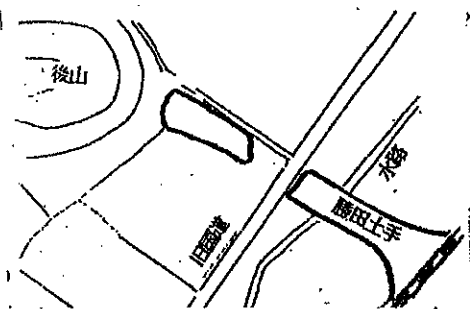
元禄十五年（一七〇二）七月十八日と八月一日の二度に亘る大洪水は、四日市・豊田・千田・古川・今在家・今村などの村々を押し流し、流れを替えて現在の法勝寺川に合流したのであった。急速、米子を水害から守るために勝田に土手が構築されたのであった。荒尾氏によって築かれた勝田土手は「新土手」と称された。これらの工事は労役は各村々に強制的の出役が命ぜられ、十五歳から六十歳まで一年に二十日で、労役に突く人の弁当は村の負担とされた。

米川の構築も同じ制度であった。

宗像土手は災害を守る為には効果があったが、その反面、土手の上手の住民は洪水により堰とめられた堤防の上は、中には一ヶ月以上水びたしとなり、農作物は皆腐ってしまい、収穫は皆無で藩に立退き願いを出した住民も多かった。

又、米原には「勝田屋敷」と呼ばれる四軒の家があった。勝田土手の上手の四軒が立退いて米原に移った家と云われている。山陰本線の横の「反向山」と言う高さ二十六米の岩山があり頂上には古墳が露出していた。今は崩され「米子市民プール」となっている。

反対側の「後山」裾とつなぐ長さ約百六十米、高さ約三米、上部は幅六米、底面は十一米であった。勝田土手の上手は「游水堤」（ゆうすいすい）と呼ばれ、洪水の際の勝田土手に堰止められた水溜場となっていたもので、明治十九年の大洪水後に日野川堤防の大改修がなされ、勝田土手の使命を終えている。



勝田土手位置図

(24)



稲荷神社（勝田番所跡）

(23)